
葵を名乗る者 ~ 秘伝葵流 ~

モーディス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葵を名乗る者 〱 秘伝葵流〱

【Nコード】

N9090X

【作者名】

モーデイス

【あらすじ】

古武道・葵流を修めし、葵3兄弟。

影ながら技を継いできた彼らが、武人の街・川神市に訪れた目的とは……？

(前書き)

時期尚早ですが、つつい書いてしまいました。

Sの二次を書くとすれば、こんな感じになるという予定です。

気分転換も兼ねていますので、こんなもんじゃないと思って流し読みしてくださいと助かります。

かつて、九鬼^{くかみ}を名乗った者たちがいた。

葵紋の当主にのみ術を教え、扶持を食んできた一族がいた。

無論、1つの家の当主にしか技を教えぬ故、その正体は不明瞭。

ある家臣がいうには、まるで忍びのような技を使うとのことであり。

また、当主の乳母が目にした折には、兵法を教えていたという。

鬚を結って城勤めをしていたので、士族ではあつたのだろうが。

分かるのは、そのことと、彼らが『九鬼^{くかみ}』を名乗っていたことのみである。

しかし、大政奉還が成され、身分制度が消失したことにより。

彼ら九鬼の一族は、野に放たれ。

その折に、当主に許しを得て、彼らは名を変えた。

葵の紋を持つ者にのみ、技を教え伝える。

すなわち、それは葵の一族であるといっても過言ではない。

よって彼らは、その日から『葵』を名乗るようになり。

彼らの伝えてきた技は『葵流』と呼ばれるようになった。

本題はココからだ。

葵を名乗るようになり、野に放たれたのはいいが。

近代化をうたう世の中は、彼らにとって暮らしにくい世界となっていた。

人を殺す術に需要などなく、学びたいと思う者も僅か。

自分たちの覚えた技術で飯を食っていくには、少々無理があった。

そこで、葵は2つに分かれた。

1つは、今までの性を捨て、普通の人として生きていくことを決意し。

もう1つは、己の技を生かす機会を求め、新天地へと旅立った。

そのうち、日本に残った一族の1人が、のちに『葵紋病院』を設立することになる。

では、アメリカに渡って行った者たちはどうなったのか。

葵の技で、いかようにして生きて来たのか。

日本にいた一族には、全く知ることができなかった。

つい、最近までは。

渋川烈火。

合気道の達人である。

より厳密に言うなら、合気道を元にした実践柔術の使い手だ。

老いてますます気性は荒くなり、精神性を欠いた武道家として名を
はせている。

が、その実力は確かなもの。

川神院の師範代クラスには劣るものの、技のキレは一級品。

合気の理を自在に操り、躊躇なく人を壊す。

川神院に属さない武道家としては、上位クラスの実力者である。

その実力者が、息を荒くしていた。

みつともなく大口を開き、少しでも多く息を吸おうとしている。

達人・渋川烈火とは思えないほどの、疲労と焦りを顔に浮かべたま
まに。

渋川の右瞼の上は、ザツクリと切れていた。

肌に汗を浮かばせ、血を流し、それを混ぜ合わせた液体が頬を流れ
ている。

その液体が目流れこんでしまったのか、右目は閉じたままだった。

場所は、どこも知れぬ路頭である。

大きな銀杏の木が1本あるくらいで、他には街灯が2つだけ。コンビニどころか、自販機の1つさえ見当たらない。

川神市にこんな場所があったのかと思わせるほど寂れていた。

そこで、渋川と、1人の男が向き合っていた。

黒い上下のトレーナーを着た、体格のいい男だ。

距離は5mを僅かに切る程度、蹴りも拳も届かぬ間。

まだまだ余裕のある立ち位置で、事態は膠着している。

「テメエ、何モンだ？」

達人は、彼の目線の先にいる男に声をかけた。

何も、答えを期待しているわけではない。

少しでも時間を稼いで、呼吸を整えるために。

そして、わざと己に隙を作り、敵の攻撃を誘うために。

だが、男は動かない。

ダラリと両手を下げたまま、顔を少し前に出して構えている。

この男もこの男で、渋川の先手を誘っている。

ということは、渋川烈火が合気道の使い手と知っているのとみてよいだろう。

渋川烈火は、元をたどれば、純粹に合気道の使い手であった。

当身も使えるが、それは、合気の技を極めるためのもの。

それを専門に習い、打撃で人を倒すという発想は、渋川にはない。つまり、打撃で先手を取るといふのは、渋川にとって不利になる。だから、男は渋川の先手を誘っているのだ。

つい先ほど、渋川はその手に掛った。

というよりも、その手に乗らざるを得なかった。

先ほどから無防備に差し出されている、男の顔。

その顔が、あまりにも打ちごろの高さにあるのだ。

仮に罠であったとしても、打たざるを得ない場所に据えられていたのだ。

もちろん、渋川は耐えた。

1分、2分……5分耐えた。

しかし、その5分の間で、集中力が削られてしまったのだ。

そこで渋川は、相手が手練であり、自分が追い込まれていることを自覚した。

言うまでもないが、渋川は老齢の格闘家である。

強いことは強いが、若い時分に比べれば体力は格段に落ちている。

相手の方が遥かに若いことを考えると、持久戦は望ましくない。

つまり、不利と分かっているにもかかわらず、手を出さざるを得なかったのだ。

渋川が察した通り、それは罠だった。

放たれた拳を避けながら、肩で上に弾き上げて。

その腕を巻き込みつつ、渋川の頭部に対して左肘を放った。

当たれば相手を殺さずにおかない、そういう肘であった。

その一撃を、なんとか避けた洪川であったが。

打ち下ろし気味に放たれた肘によって、瞼の上を切り裂かれ、拳句、腕を巻きこまれたせいで、肘を痛めつけられた。

一撃で2つのダメージをもたらす、洪川の知らぬ技であった。

そして、今に至る。

洪川のみが怪我をし、洪川のみが息を切らせ。

無傷で息の整った男が、洪川を暗い瞳で見据えていた。

「けつ。名も名乗らねえたあ、武人の風上にも置けねえヤツだ」

苦し紛れの時間稼ぎは、まだ続く。

年齢のせいもあるだろうが、集中力が戻らない。

そして、相対している強烈な男に、隙が見当たらない。

今の言葉も、そんな中での破れかぶれの一言だった。

だが、その言葉を聞いて。

男が、くふつ、と小さく笑った。

唇の間から、偶然小さく空気が漏れてしまった。

そういう笑いであった。

「よもや、洪川烈火に武人の道を解かれるとはな」

口元を僅かに歪め、男はそう言った。

それはつまり、渋川のことをよく知っているということだ。

「なんでえ。オイラも有名になっ」

言葉の途中で、男が間を詰めてきた。

男が、渋川を相手に先手を取ろうとしてきた。

本来であれば、相手から先に攻めてくることは、渋川にとって有利になることだが。

今の渋川は、完全に対応が遅れていた。

タイミングもそうだが、それよりも、間合いを詰める速度が絶妙なのだ。

早くもなく遅くもなく、散歩でもするかのような速度で歩を進めてきた。

それより早い、あるいは遅かったなら、渋川は十分に反応できただろう。

しかし、過去に経験したことのない速度は、渋川の判断録を鈍らせた。

渋川が心を決める前に、蹴りの距離を超え。

次いで、拳の間を超え、肘の間合いを超え。

男の顔が眼前に迫ったところで、渋川の股間に激痛が走った。

垂らされていた、男の右手。

その右手が、いつの間にか渋川の股間を握り潰していた。

「かつ……！」

渋川は、喉の奥から絞り出すように呼気を吐いた。
内臓を潰される激痛が、突然に襲ってくる。

達人といえども、動きを止めるのは必然だろう。

その渋川を、男は投げた。

柔道で言うところの、肩車に近い形だろうか？

渋川の股に肩を差し込み、担ぎ上げ。

そのまま地面に向かって、頭部から落とした。



武人の末路が、そこにあつた。

血に濡れ、地に打ち捨てられる。

いつかは巡ってくる、武人の最後。

渋川烈火に、ついに、その日が訪れた。

ただそれだけだが、だからこそショッキングな光景だった。

「……この程度か」

そう呟くと、男は、懐から一枚の布を取り出した。畳んだハンカチ程度の大きさの、小さな布切れ。それを、渋川烈火の傍らに、ふわりと投げた。

その布には、血のようにドス黒い、三つ葉葵があてがわれていた。

達人、渋川烈火が重傷を負わされる2週間前。
3人の男が、日本の土を踏んだ。

男たちは、いずれも黒い髪に、黒い瞳を携えている。
東洋系……日本人らしい顔つきをしているが、彼らは日本人ではない。

少なくとも、国籍の上ではアメリカ人であり、いわゆる日系である。
この国の血が自分たちに流れてはいるが、この国に踏み入るは初めてだ。

彼らのいる場所は、とりわけ賑やかなしい。

というのも、そこが空港であるなら当然の道理ではある。

迎える者、迎えられる者、見送る者、見送られる者。

様々な転機を迎えた人々が、所狭しと詰め込まれているのだから。

そんな中であつて、男たちは静かなものだった。

荷物を受け取つて早々、人ゴミから離れた場所に陣取る。

疲れた様子こそ見せないが、3人の中で中間の背丈を持つ男のみがイスに腰かけた。

4人掛けのイスだというのに、大きな男と、僅かに小さな男は立つたままでいる。

周囲に無言の圧力を広げながら、彼らは場所を譲ろうとはしなかった。

どうやら、この3人は縁者らしい。

3人の誰の目も、黒目の部分が普通よりやや小さい。

また、程度は違つが、形よく額が広がつており。

3人の誰もが、蛇のような感情を感じさせない瞳をしていた。

しかし、そんなことは些事だ。

並々ならぬ屈強な体こそが、彼らを際立たせている。

小さい男でも180cm近くあり、一番大きい男は190cmを優に超える。

しかも、そのいずれもが鍛え込まれた体であつた。

平均的な日本人が多く集まる場所で、目立たないはずがない。

もつとも、スポーツジムなどに顔を出しても、確実に人目を引くに違いない。

「なあ、兄貴。そろそろどこに行くのか教えてくれないか？」

一番小さな男が、彼より少し大きな、イスに腰掛けている男に聞いた。

兄貴、という言葉聞いて、もっとも大きな男も、座っている男に目を向けた。

ということは、恐らく、座っているこの男こそが長兄なのだろう。

「そうだな」

そう呟いて、男……長兄は遠くを見つめた。

否、単に遠くというわけではない。

彼らが住んでいた土地、アメリカに向かって目を向けていた。

住み慣れた土地に執着があるのか、それとも、そこに何かがあるのか。

それとも、思い出に浸るような何かがあったのか。

いずれともとれるような、恍惚とした視線だった。

しかし、そのように蕩けているのは視線だけ。

口元にも、頬にも、表情のどこにも感情はこもっていない。

彼の視線だけが、なにか感情めいたものを放っている。

ただ、それだけのことだ。

兄と呼ばれた男がそうしている間にも、他の2人は動かない。大きな男も、僅かばかり小さな男も、兄の言葉を待つばかり。

仏頂面をそのままに、むつつりと押し黙っている。

たっぷりと1分後。

周囲の喧騒と相反していた沈黙は、ついに破られた。

「川神市」

武士道プランが提唱され、その本拠地となった川神市。男たちは、どうやらそこに向かおうとしているらしい。そして、男たちの体格と雰囲気を加味すれば、何をしようとしているかが分かる。

川神市とは、武道の達人が集まる土地。

より厳密に言うなら、武道というよりは、武士が集まる土地。人を殺す技・人を倒す技の熟練者が集まる場所。

「むっ」

「おっ」

2人の弟は、それぞれ声を上げた。

その声にもやはり、歓喜の色が混じっている。

それも、いたしかたないだろう。

ついこの間、彼らは、長年の呪縛から解放されたのだから。

人を殺す技を身に刷り込みながらも、それを隠して生きる日々。使うことのない技を、永遠とも思える時間をかけて磨く日々。そのような日々が終わりを告げ、自由に技を振るえるようになったのだ。

ようやく、人を壊す技を、人に使えるようになる日が来たのだ。歓喜を覚えぬはずがなかった。

「ということは、兄貴……」

「ああ」

もっとも大きな男が、興奮を抑えきれずに長兄に問うた。

無論、この場に至って問う必要などない。

彼らが葵流である、そして、川神市が武の街である。

その2つだけ分かっていたいれば、自ずと答えが見えてくるのだから。

「葵流を、天下に知らしめる」

長兄、葵あおい文吾ぶんご

次男、葵^{あおい}
三男、葵^{あおい}
密丸^{みつまる}
飛丸^{とびまる}

葵の血を引く3人が、今、川神市に波乱を巻き起こす。

(後書き)

ううむ、やはりグダグダしましたね。

葵3兄弟を書きたくて仕方なくて、ついつい書いてしまいました。
前書きでも書きましたが、Sで二次を書くなら、このキャラクター
たちを使うことになりそうです。

……あー、我ながら相変わらずですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9090x/>

葵を名乗る者 ~ 秘伝葵流 ~

2011年10月25日03時06分発行